

第2回 市民活動促進協議会（第8期） 会議録

- 1 開催日時 令和3年11月19日（金） 9時30分～11時30分
- 2 開催場所 静岡庁舎新館9階 特別会議室
- 3 出席者 <出席委員>山岡会長、山本副会長、池田委員、大畑委員、片井委員、川村（栄司）委員、北川委員、田中委員、殿岡委員、深野委員
<事務局>萩原市民自治推進課長、杉山係長、青山主任主事
- 4 傍聴者 0人

5 議 事

（山岡会長）

改めましておはようございます。こうして対面で協議会ができるということがまずよかったなと感じております。それでは次第に沿いまして、まずは事務局から報告事項の説明をお願いします。

報告事項 今後のスケジュールについて

【事務局説明】

（山岡会長）

ありがとうございます。ただいまの説明にご意見やご質問などありますでしょうか。

（深野委員）

皆さん、おはようございます。深野です。市民参画についての質問と意見です。10月に行われましたワークショップに木下委員と田中委員が出席されたとお聞きしましたが、これは、どのような意味を持って行われたのでしょうか。私の考えを先に述べますと、市民活動推進という目的を果たすためであるとすると、市民の声をもっと広範に集める機会を作ったほうがいいのではないかと考えます。このワークショップが1回だけとなると少し物足りないと思われますし、ワークショップという形でなくとも、もう少し市民の声を集める機会を作ったほうがいいのではないかなと思います。本計画では、市民の参画を呼びかけることを中間見直しでも確認しました。その参画をどのように体现するか。それは、やっぱり計画を作るところから体现すべきであり、単に基本的な数字の確認だけでは足りないように思います。そのようにして策定した計画案をパブリックコメントに諮ったところで、本当に市民の皆さんがこの計画について知ることができるのか。この計画が何なのかというこ

とを皆さんが知る機会を共有しつつ、一緒に策定していくという点を、やはり言いたいなと思いました。

(事務局)

ありがとうございます。10月に行われましたワークショップの内容については、出た意見を市民活動促進基本計画に受け込むような形で考えたいと考えております。市民活動に精通されている協議会委員の皆様については、市民の方々の意見はこうだという参考意見としていただきつつ、議論を進めていただければよいと思います。今後の市民の声の聴き方については、そうした場を今後設けることができないか検討していきたいと考えております。

(深野委員)

ありがとうございます。もう一回くらいワークショップをやる可能性があるということですか。

(事務局)

検討します。

(深野委員)

この計画を立てるにおいて、もっと市民の声を聴く場を持つほうが、より良いのではないかというのが私の意見ですが、それについて皆さんどういうふうにお考えでしょうか。協議会の委員として集まり、決められた計画が、市民が自分たちの計画だというふうに思えるかどうか。他の委員会は別にしても、市民活動推進というふうに名前を名乗っているのであれば、そこは他の委員とは違うやり方があってもいいのではないかというのは私の意見です。

(大畑委員)

ご意見に賛同します。やはり市民の声を反映させないと意味がないと思うんですね。いかに市民意見を吸い取るか、吸い上げるかということが重要なポイントだと思います。それが本当の意味の審議会であるし、次に繋ぐ私たちの役割じゃないかなというふうに思います。

(池田委員)

確かに市民の声を反映させる必要はすごくあると思いますが、今回のワークショップのオンラインの内容を見ている限り、やはりどうしても偏りや、こちらとして把握しようがない部分が多い。そういった意味で、ワークショップ等に出てきたものだけを市民全体の意見と取るのはすごく怖いと思います。そうした部分についての配慮は必要なのかなと思います。

(深野委員)

私が聞いたところだと、80人募集のところを20人弱の参加しかなく、それもスタッフやその他が入ったの数なので、真水の市民は何人ですかとなると、池田委員がおっしゃるようにそれを市民全体の声とするのはどうかと思います。だからこそ、もう少し幅広の機会が必要じゃないかなと思います。

(片井委員)

私は防災に関する活動をしています、大学の有名な先生や著名な人による防災講演会に参加しています。その中で出てくる言葉が、どうしても同じような内容になってしまう。だから、このワークショップもどこでどうやるか、どういう方法でやるか考えないと、同じ人、同じ思いを持った人しか来てくれない。それをどうやって広げるかが一番大事だと思います。やり方をしっかり考えてやらないと、例えば地域ごとの開催をし、市内全域を細かく聴いていくようなやり方もあり得ると思います。

(深野委員)

それについては、やり方を本当に考えなければいけないと思います。例えば、他の市町の実例を見ていると、無作為抽出で市民の方にハガキを出し、そこで選ばれた方たちが来て、多様な意見を述べるというやり方も行われています。そういった事例を、ここの計画を立てるときに取り入れたらどうか。それこそ、開催の方法をもっとこういう場で話し合っ、どうしたら広範囲の市民の意見をここに持ってこられるかを考えられればよりいいのかなと思います。

(山岡会長)

ありがとうございます。すごく難しい問題で、どこまでやれば吸い取ったと言えるかという話もありますし、あともう一つ、協議会という仕組みの中で案を作っていくことは、皆さんが市民の声を代表しているという前提があります。色んな人との関わりや市民活動、あるいは、もっと違うセクターとの関わり、色んな人の声を持ってこの場に来られているという認識もあると思います。だから、去年はワークショップを2回やっているわけですね。2回やればいいかということそうではないし、やり方の問題もあると思うので、もっとやりましようとするか、ここで終わりにしましょうかとするのは、すごく判断が難しいと思います。他方で、今日のワークショップで、我々が現場で聴く声をどういうふうにしたら反映できるだろうかということ意識することも重要だと思うし、今の時点で事務局側が「もう1回やります」「2回やります」とすぐお返事はすることも難しいですし、無作為抽出も今から開催することは難しいと思うので、やっぱり可能なところで今日出た意見を踏まえて検討いただくしかやりようがないかなという感じはします。

(山本委員)

深野委員のご意見に、本質のところでは賛成ですが、時間が足りないと思っています。もし実現するのであれば、二年前から制度設計を考える必要があると思います。70万人弱の政令市で、3区にも分かれていて、市民活動という分野には同じ顔しかない状態がもう生まれている。皆、人生にブレーキがかかるようなことや、当事者にいきなり行きあたるようなことがなければ、市民活動には行き会わないですよね。行き会わない人に対して、行政よりも、根本の生きていく人たちの連帯の仕組みがあることを伝えることは難しい。それには、今からでは時間が足りないと思います。逆に、ここから8年の計画を作るなら、それを盛り込むべきだと考えます。仕組みはすぐに変えられるわけじゃないので、次の8年にその変わるためのフックができる、そういう計画をこれから作っていくと考えたほうが私はポジテ

イブだと思います。

(深野委員)

山本さんの意見もわかるし、時間が足りないというのも十分認識をしています。本計画をより良くするために、もう少し市民の声を入れられる余地はありませんかということと、次の計画にそういう制度設計や思想を織り込むことは必要だと思います。だからといって、今回は時間がないから仕方がない、では済ませたくないなと考えています。

(山岡会長)

今の深野委員の発言は、私はすごく大事だと思うので、今日のワークショップもそうですが、市民の方たちが自分たちのものだと思えるような計画を作っていかなければいけないことを意識していきたいと思います。答申を出すにあたっては、協議会として一定の回答を出す必要がありますが、市民の皆さんに「こういうものって行政が作っているものだよ」という風に思われたいようなものにしたいと思います。そのために、協議会にも多様なメンバーが今集まっていたいただいているわけですね。この件については、事務局のほうでも検討いただけないということなので、協議会の回数は限られますけれども、是非取り入れていければと思います。

(山岡会長)

他はいかがでしょうか。よろしいですか。ひとまずここは、こういうスケジュールフローの確認ですので、もし気になることとかがあれば、個別に事務局に問い合わせさせていただくということでも構わないと思いますので、そのようにしていただければと思います。それでは議題について、事務局から説明をお願いします。

議題 「2030年度のあるべき姿」について

【事務局説明】

(山岡会長)

ありがとうございます。進め方とお配りいただいた資料、これから議論する際に参照しながらという資料ですけれども、何かご質問はありますでしょうか。

(川村委員)

「より多くの市民が担い手として参画する」という案が示されていますが、この案自体も確定していないという理解でいいですか。

(事務局)

おっしゃる通り、あくまでたたき台として使っていただければ結構です。この案は、より多くの市民が担い手として参画するまちづくりというような、キーワードの分割として考えていただくとやりやすいと思います。結果として、これと全く別の案が出てきてもよろしいと考えております。

(川村委員)

本日のテーマが「2030年の目指す姿を具体化するためのキーワードを見つける」ということですが、テーマ自体が漠然としていて、2030年の目指す姿は、市民協働が進んでいるとか、市民参画が進んでいるとか、そういった形があると思いますが、まさしくその部分が議論の対象になるので、キーワードを出そうとすると、どういう観点から出せばよいのか難しいと思います。

(事務局)

後ほどご説明をと思っていましたが、資料2-1に、オンラインシンポジウムと、これまでの市民活動促進協議会で出た意見を4本柱にまとめております。現在の計画では、「知らせる」「やってみる」「深める」「つながる」の4本柱で構成をされています。現状、新計画もこの4本柱という形式を維持するかどうかというのは、これからの話ではありますが、考え方自体は4次計画にも織り込まれるものだと考えています。ひとまず、本ワークショップの軸としては、現状では3次計画の基になった4本柱に着目しながら考えるのが、まず一つの手かなと考えております。今回はあくまでフラットな意見をいただきたいというところで、どのように静岡市の2030年の姿をデザインしていくのかという点に関するキーワードを出していただきたいと思います。

(事務局)

補足いたしますと、第3次の計画では、8年後の目指す姿というのが第一にあり、そのため何をやるかというような組み立てになっております。まずは、この8年度の目指す姿というのはなんなのかというところを決めたいと思います。今日、この場で決めるというのは難しいと思いますので、こういったフレーズがここに入ってくるか、キーワードを出していただくのが今日の目的になっております。

(深野委員)

確認ですが、そもそもこの市民活動促進基本条例というのが、市民自治という考えから流れてきているものだと理解をしています。その市民自治という意味において、今、ご説明のあった8年後の状況というのが、外国籍の方が増え、高齢者や単身世帯の中で、孤立や、分断とは言いませんが、色んな意味でバラバラになっているような社会が広がるような可能性があるという見通しがある中で、バラバラになった人たちをどうまとめて、もっと市民が主体的にまちづくりをできるようにできるかということを考えるみたいな感じでよろしいですか。

(事務局)

2030年の静岡市をどういうふうに目指そうかなというのがまずあり、例えば、困難を抱える方が増えるだろうという2030年の静岡を想定するのであれば、そういう方が救われる静岡市を目指すべきだというような発想はあり得ると思います。そうした発想の下で、施策をどういうふうに打とうかというような考え方をしていく。今回のテーマの中心になるのは、困難を抱えた人をどうやって助けようかではなく、助けられている静岡市でまずありたいという、そういったキーワードを出していただくことになります。

(深野委員)

それは、目指す姿のキーワードで、本日のテーマでは具体化するためのキーワードと書いてありますね。

(事務局)

具体化という意味合いについてですが、3次計画では、8年度の目指す姿は「より多くの市民が参加するまちづくり」となっています。それでは、2030年の静岡はどうなっていればいいのかという点が漠然としており、少なくとも、この協議会の中でも固まりきっていないところはあるとは思いますが、もちろん、皆さん共通したイメージはお持ちだとは思いますが、それをまず具体化して、今回のゴールとしてはキーワードが3つ、4つくらい出てくればよいと思います。それを一つの大きな、例えば「より多くの市民が参加するまちづくり」という一つのフレーズにまとめていくのが、今回のワークショップを踏まえた先の作業になります。

(山岡会長)

よろしいですか。始める前の確認ですので、きちんと確認をしていただければと思います。

(山岡会長)

おそらく、こういうフレーズというのは、すごく漠然としたものになりますし、キーワードを全部盛り込んでいくことが不可能ではあると思いますが、このフレーズがどういうプロセスで出てきたのかということは、きちんと協議会の中では抑えておく必要があるし、そこは丁寧にやらないと、それこそ自分たちとは関係ない計画になってしまうかなと思います。それを踏まえて、今回ワークショップというやり方をとることについて事務局と相談した次第ではあります。

(北川委員)

確認ですが、2030年というのはゴールでしょうか。それとも、途中ででしょうか。そこが、私には掴みきれないのですけれども。

(事務局)

4次基本計画の計画期間が、2030年までになっていますから、2030年にとりあえざるゴールというか、4次計画のゴールが2030年ですから、2030年に定めたゴールに向かって何をやるかというのが、4次計画に盛り込んでいくことかなと思います。

(北川委員)

そうしますと、本来どうありたいとか、どうあるべきだという本当のゴール、ずっと先かもしれませんが、そのゴールがあって、そこに対して今回第4次というものを途中段階として定めるといふ、こういう位置づけという理解でよろしいでしょうか。

(事務局)

そうですね。

(北川委員)

だとすると、まず、どうあるべきかという理想の形が決まっていなければ、その途中の段

階のところがバラバラになってしまうような印象を受けますので、その点について皆さんの意見を聞かせていただくと、私自身も理解が深まるのですが、いいですか。

(川村委員)

8年計画になっているのは、元々市長の任期が4年で、その2期分ということですね。普通は中期計画だと3年程度ですが、あえて4年×2になっているわけです。2030年と言っているのは、次のゴールではあるのですけれど、最後のゴールというのは多分見えないと思います。ゴール自体が変わっていくという流れの中で、2030年の一応のゴールのようなものを決める。それがゴールであり、中間点でもある。そのときになってみると、また次の価値観が動いていて、どんどん変わっていく。だから、これから8年計画を作るときも、一回作っても途中で見直しが必要入るでしょうし、変わっていてもいいと、そういうふうに私は理解をしています。

(山岡会長)

そうですね。状況が変われば目指す姿が変わる可能性はあるので、ある程度期間を区切って計画を作っているのだと思います。ただ、それではここまでのことしか考えなくていいのかというと、そうではなく、北川委員がおっしゃったように、その先のことも見越して8年後こうするべきだというのは当然議論の中に入れておくべきだと思います。期間を区切るというのは、そういう理解でいいかなと思います。

(山本副会長)

私は、今のお話結論は持っていませんが、この問いが出てきたこと自体が素晴らしいと思います。まず、私は、静岡市があろうがなかろうがここで生きていくので、私の理想や私の周りの人たちが思い描いているものは、私は代弁できませんけども、それが大前提にある。市民活動は、それを大前提にそれぞれが話し合うところから始まる。どうしても森で例えちゃうんですけど、管理された森じゃなくて、植物が活力をもって増している状態が、そこで人が生きている状態だと思うので、そのパワーがありつつも、秩序だって社会を形成している二つのものが、どう折り合っていくかという、それが私の社会観なんですけれども、それを基に、でも、やっぱり行政区は行政区でやるべきことがあると思います。その中で、じゃあ、このたった1行か長くて2行、これをどう編み出しますかという点が、今、私たちに問われている。そういうふうに理解していますので、どこがゴールなのか、どこが中間地点なのかを未来志向で考えるという素晴らしい問いをいただきながら、今、この時点の未来の理想の言葉をそれぞれが出すのが、この場の役割かなというふうに理解しています。これが、市民皆でもっとたくさんやれたら素敵ですよ。

(山岡会長)

いかがですか。よろしいですか。

(深野委員)

要は色んな状況が変わってきて、例えば、外国人や高齢者が増えるなど、今までの行政のシステムではまかりきれない状況になってくる。そうしたときに、行政だけではなく、むし

ろ市民の皆さんと一緒に、この課題を解決したり、より良くまちづくりをしていきたいと思いますということ、市としては求めていますということですね。行政が今まで全部決めて、お膳立てして、「はいこれです」ではなく、もう少し市民も参画し、もっとむしろ積極的に市民の声を聴きながら、まちづくりに活かしていく。そのための仕組みだということ、やっているという理解でよろしいですか。だから、こういう手順を踏んで、色々な計画を立てましょうという市民自治とかいう言葉が出てきているわけですね。

(事務局)

行政側から見ると、そういうことになるかと思うんですけど、一方で、市民活動は自由で自立的なという話もありますので、市民活動団体の方が、別にそのために行政がやっているだけじゃないよという考えもあると思います。その辺りについても配慮しながら計画を策定していきたいと考えています。

(山岡会長)

よろしいですか。こういった協議会でワークショップをやることは、私の経験上はそんなにないことですので、奇異に思われるかもしれませんが、議論するにあたって気になるところも多少まだ皆さんおありかなと思いますが、ひとまずやってみて、進めていきたいなと思います。

ワークショップ 「2030年度のあるべき姿」について（別紙のとおり）

(山岡会長)

それぞれ分かれてやっていただいたので、こっちのチームではこんな意見が出たよとか、最初は山本副会長からお願いいたします。

(山本副会長)

皆さんのキーワードをいただきまして、私が、これはすべてにおいてさらに上位をいっているなと思ったのが、「生活に溶け込んでいる」というものです。どうしても行政さんの土台の上に「皆さんどうぞ乗って下さい」みたいになってしまいがちですが、お客さんではなく、私たちはここで生きて暮らしている当事者だよねという意味で、生活に溶け込み、当たり前、日常的であることというのが、やっぱり状態の基本ではないかというのが一番心に残りました。まちづくりを目指すのではなくて、この状態が当たり前になっているよねという。もう一つは、やはりワークショップの中でもテーマとして出ていたようですけども、これからの静岡市を考えるに、例えば、隣に住んでいる人が何の宗教で、どう思っていて、どういう暮らしをしているかわからないといった状況を前提に作らなきゃいけない。そうした中で、多様というのも外せないのではないのでしょうか。多様を受け入れるためには、言葉を交わさないとわからないので、そういう意味でたくさんの言葉を交わし合える。結局は、それは意見になって育っていく基礎になっているので、そういう状態が当たり前であること。困っていたら支える、それが自然に行われているということですね。一つ誇り高いと思った

のは、「高齢者を担い手としたまちづくり」です。お年寄りだから支えられると思ってい
ないですね。高齢者同士で支えていくという誇り高いご意見をいただきました。どうしてもこ
ういう流れになると、一緒に、多様に理解し合っという流れになりがちですが、自由であ
ること、新しい挑戦をすること、これを支えて寿げる街でなければ前に進めないですね。
ちょっと心情的には反するようなものだけど、二つの要素が入ったらいいなというのは、私
もお聞きしていて思ったところです。「クリエイティビティ」も繋がりますね。そして、も
う一つ大事な意見ですが、「事実に基づいて、ファクトを押さえながら」というものです。
ここはやはり行政さんと一緒に、是非やりたいところです。というのが、ご意見の全体像
です。まとまったわけではないですけども、要素としては、「より多くの」といっても、
数じゃない違う要素が入ってくるということ。「市民」ではなく、例えば「共に生きて暮ら
すお互いとして」などはどうか。そして、そのような状態が当たり前になっていること。そ
のようなフェーズになったら、このグループとしては、腑に落ちるものかなと思います
(池田委員)

本当にたくさん意見が出まして、構造的にちゃんと流れが出てきました。例えば、参画が
主体的に進んでいくと、多様性がどんどん深まっていく。それをまた広く伝えていくこと
で、人は繋がって行って、それが自然な状態の市民活動というものになっていく。そうす
ること、こういった未来、まち、夢があり、楽しむことができるというまちができてくる
という流れが出ました。ただ、「参画」とか、「主体的」「自立的」というのは、どうし
ても重たい言葉になってしまうので、そこは、もっと軽やかであってもいいのではない
かという話が出ました。「担い手」という言葉もありますが、どちらかという、行政
からの話になってしまうという意見がありました。そこで、どんな形がいいだろうとい
う話をしたときに、やれる人がやれることをやる。限られた人ではなく、誰でも関
わるることができる。もうその状態が当たり前である。知らないうちに市民活動をして
いるという状態がよいという意見が出ました。その中で大事なのが、現在はどうし
てもお金の豊かさというのが尊重されていて、そこに集約してしまうと、繋がりも減
っていくし、行政サービスについても「税金を払っているから受けられるのが当
たり前じゃないか」というギスギスしたような状態になっていくということで、や
はり、この行政のあり方についても、もうちょっと考える必要があるという意見も
出ました。その中で、やはり忘れてはいけないのは、誰一人取り残さないことが、
SDGsに繋がっていくという流れかなということ。結論としては、「担っていること
に気づかない。当たり前のような状態」がよいのではないか。そうすることで、よ
り良い地域づくりというものに繋がっていくのではないかという話になりました。

(山岡会長)

ありがとうございました。両方聞いていただいたので、すごく重なる部分もありますが、
ちょっと違うところもあるので、お互いの意見をご覧いただいて、全体で意見交換を
する時間を取りたいと思います。その前に、事務局から資料の説明をお願いします。

全体での意見交換について

【事務局説明】

(山岡会長)

それでは、まず山本さんと池田さんに一言ずついただきたいと思います。

(山本副会長)

こんなに似通ったのは、先生がおっしゃったとおり、コロナ後という未来を考えざるを得ない中で出てきた言葉群なんじゃないかなと思っています。一番いいのは、やはり「生活に溶け込んでいる」「当たり前」という言葉で、それを私が目にしたときに、これは市の計画の中の言葉だけど、少なくともここにいる私たちが誇りを持って言える言葉であることが大事だなと思いました。私は、子どもを相手にもしているので、子供たちに対して胸を張って「私たちは10年後にこうしたいんだよ」と言える言葉であるのが、このワンフレーズの目指すところだなと思いました。

(山岡会長)

そうですね。活動されている方は肩ひじ張っているかもしれないけど、やっぱりそうじゃないぞということだと思えますよね。「当たり前」「普通」「自然」も出ていますね。そういう点を目指していきたいというのが、一つ共通認識だと思っていいのかなと思います。

(山本副会長)

「公共心」というとすごく堅いですが、「市民活動なしで一体暮らすことができるのか」とすら思います。一方で、若い世代や、まだそういう考えを持っていない人に押し付けるのではなく、生きるってこういうことだと思っていただける機会をたくさん作っていきなと思いました。

(池田委員)

2つのグループで似通った意見が多々あったという結果を受けて、逆に違うステージの話になりますが、3次計画の施策の柱は、「知らせる」「やってみる」「深める」「つながる」それ以外の視点が入らないと、埋まらない部分もあるのかなと思います。多分「知らせる」では足りるのではないかと思います。気づきだとか、あとは、知ることの必要性って、オンラインシンポジウムを見ていても、私たちがイメージを抱いているものと乖離をやっぱり感じます。そこをどうこう埋めていくのかというのを考えていけない段階に入ってきたのかなと思いました。

(山本副会長)

「知らせる」も、どこか目線があって、知らせてあげるみたいな印象がありますね。他にいい言葉を生みたいですね。

(山岡会長)

ワークショップの意見にある「開く」「拓く」「浸透」がそうした意見に対応する言葉と思

います。「知らせる」と言ってしまうと、閉じる感じがあり、限られた範囲で関わる人が知らせるという印象になります。それこそ「当たり前」とか「自然」など。参加していると思っていないけれども参加しているとか、繋がろうと思っていないけれども繋がっていると、そういった要素だと思います。

(深野委員)

当たり前にしていくために、知らせるではなくて、共通認識を得られるような土台作りとか、共通体験ができるような、大事なことだと体験できるような場づくりが必要ですね。

(山岡会長)

当たりの状態にするために、何かしらの意図は必要だということですよ。

(深野委員)

そこは市民活動センターも含めて、もう少し広げて話ができるといいかなと思います。

(大畑委員)

「知らせる」に関して私が思っているのは、参画などの意識がないまま楽しそうに活動している姿がそこら辺に何人かいて、今までそういった活動に関わっていない人が見たときに、「なんだかあの人随分楽しそう、聞いてみようかな」というような入り方を、こっちから知らせるんじゃなくて、向こうから聞いてくるような、そういう楽し気な人が増えるといいんじゃないかなと僕は思っています。

(山岡会長)

そういう関わりがあると、知らずに巻き込まれていくみたいなことは起きやすいでしょうね。皆さん自由に感想でも構いませんので、おっしゃっていただければ。

(池田委員)

助けられたり、助けるというのは、あまり A グループにはないのですね。

(山岡会長)

支える、支えられるとかはありますね。自由・挑戦を寿ぐというのが、私は面白いなと思っています。自由、挑戦を寿ぐとかみたいなことで、それは大前提だなと思っています。市民活動はやらなければいけないからじゃなくて、自由であって、好きだからやっているんですよ。それを前提として、その自由さの中に挑戦する自由というものもある。そういう雰囲気のことですよ。

(殿岡委員)

静岡市でも人口は減ってきていて、やはり助け合いが必要になっていくんだというのがまず頭にあります。そちらのグループの結果を見ると「未来」などの言葉があって、静岡を出ていった子どもたちがなかなか戻ってこないという状況もあり、やはりそういう未来志向を頭に入れて考えないといけない。

(山岡会長)

その辺は SDGs とか、あとは、こっちはファクトに基づいて、今おっしゃったのはファクトですよ。その上で未来をどう作っていくか。こっちは負の面、格差とかを抑えて、似た

ようなことだと思うんですね。

(深野委員)

自由という話でいうと、義務感でやらなければいけないことをやるんじゃないで、やりたいことを、それも自分がもちろん楽しいけれど、より人のことも考えつつやりたいことをやった結果、未来が良くなるよねとか、自分のやりたいこと、あるいは言ったことが実現されるようなところだと、住んでいてもいいかなと思うので、義務感じゃない自由さ、権利という言葉は堅いし、何なんですかという話もあったので、僕が言いたいのは、義務感じゃない感じの「ねばならない」じゃなくて、やったほうが楽しいよみたいなものがあるといい。それが当たり前になると、よりよいですね。

(山本委員)

誇りたいですね、誇ってほしい。まず、自分であることを誇る。どうしても日本人はわがままとかいう文脈に行きがちなんだけど、そう言っている場合でもなくはないという。一人一人が。

(山岡会長)

目指す姿ですからね。いい気がしますけどね。もちろん、そんなふうにできたらいいと思うし、ひょっとしたら行政の方も難しい部分があると思われるかもしれないけれども、目指す姿ですから。

(山本副会長)

そうです。目指す姿として、志は高くていいですね。

(山岡会長)

計画に落としこむときにすごく苦勞するかもしれないですが。

(深野委員)

それを行政が、自分たちがやらなきゃと思わなければいいですね。こうみんな言っているけど、みんなどうする？と、市民の側に任せる。自分たちがやらなければならないと行政が思うから、間違ってしまうかもしれないですね。

(山本委員)

行政サービスという言葉にすると、縛られていますよね。私たちは消費者というわけではありませんので。

(山岡会長)

だから、これを切り離そうという話をこちらのグループではしてたんですね。当たり前とか、自然とか、誰でも、いつでもとか、その辺りの要素が大切だという気はしますよね。叩き台なので叩かせてもらいますけれども、「担い手として」というワードではなさそうだとすることは確認できました。もっと緩やかで軽やかで自由でという感じを目指したいと。少なくともここではということが確認できたかなということでもいいでしょうか。では、時間も来ましたので、こういう形で事務局の方でまたキーワードまとめたものを作ってください。本日の議事は以上になりますので、事務局にお返しします。

グループ1

義務的でない、自由さ・軽さ → 市民活動をしていることが当たり前になる、自分でも気付かない

互助

住民同士で助け合い

助け合い

ためらわず手を取れる

高齢者を担い手としたまちづくり

助けたり
助けられたり

自由、自発

ワクワクしてやること

楽しんでやること

権利としての市民活動

自分らしく生きられるまちづくり

自由な

自発的なもの

主体的

いのちあふれる

多様性

違いを愛せる

多様な

「市民とは？」を語り合えるようなスペース

静岡市民のアイデンティティ

開かれた、閉じない

生きる誇り

気付かないうちにやっている

若者

山間地利用

プロセスづくり

市民自治

市民主体

市民が自分の住むまちの未来づくりに参画できる

みんなの知恵を集め活かすしくみ

意見が活かされるしくみ

創造力

自分たちで課題解決

決める力

ないからつくる

ほしいからつくる

ファシリテーター

ビッグデータ

挑戦

スムーズに

ファクト

データの可視化

読み解く力

あたりまえ化

生活に溶け込んでいるもの

日常的なこと

みんなの当たり前

自然と

生活の一部のこと

- ・ 日常としての市民活動
- ・ 市民活動が日常のまち
- ・ 市民活動をあたりまえに
- ・ 市民活動があたりまえのまち

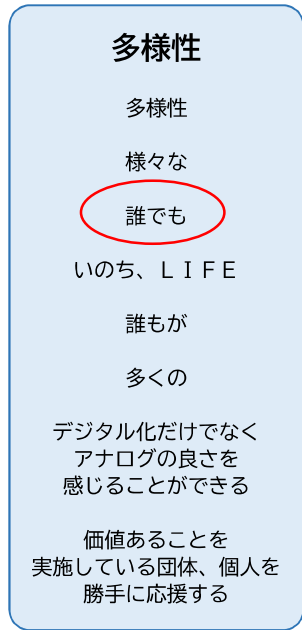
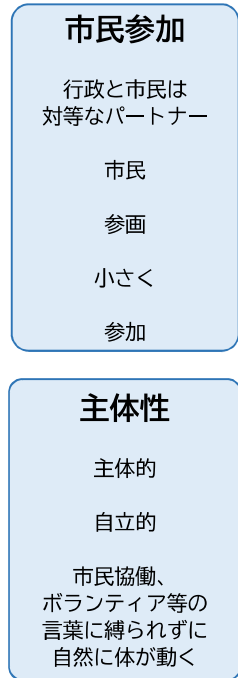
4本柱「知らせる」…閉じたようなイメージ
当たり前にする、気付いていない・目覚めていない人が
自然に目覚めるような形が理想的

共通認識を得られる体験が必要…共通体験、機会の創出
自由や挑戦を言祝ぐ

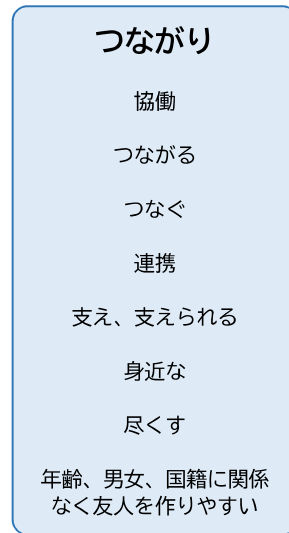
「多様な主体が共に生きるお互いとしてあたりまえに支え合う社会」
→短くまとめた

グループ2

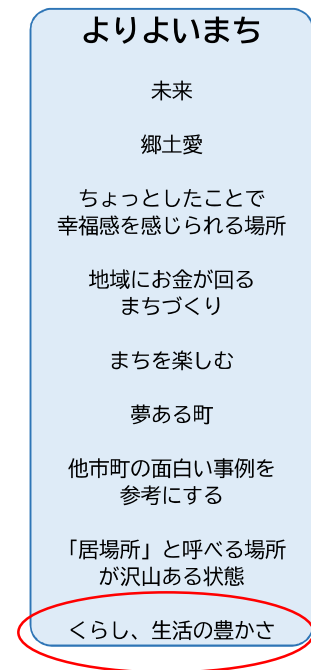
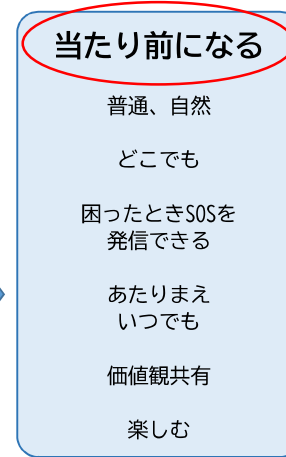
自由、自立的な活動→多様な広がり



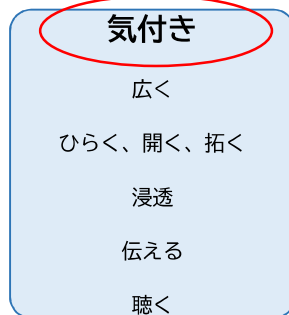
広がり→繋がり



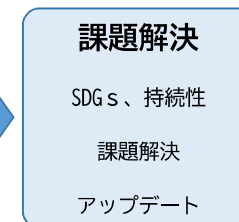
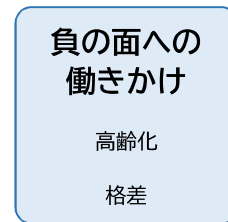
市民活動の「あたりまえ化」→よりよいまちに繋がる



市民活動の緩やかさ、軽やかさ、自由さを表現



多様な活動→広がり、浸透、気付き



第3次計画 目指す姿「より多くの／市民が／参加する／まちづくり」

- ・より多くの市民→多様な主体、誰もが、多様な人々が
- ・参加する→あたりまえに~する
- ・まちづくり→まち